校内研修計画

山梨市立岩手小学校

１　学校課題

児童は学習に対して前向きである。授業中の学習作業にもよく取り組む。しかし、学習したことから自らの学習課題を見つけようとする意識や、その学習課題に向かって取り組もうとする意識はまだ少ないと思われる。

地域に大きな産業がないため、親は近隣の市へ勤めていることも多い。親が勤めておらず家庭にいる児童は１８％に留まり、児童は一人で家庭学習をすることが多いと考えられる。また、習い事をしている児童も少なく、家庭学習をした後は近くの友だちと遊んだり、家でゲームやビデオを見たりしていることが多い。昨年度の学校評価集計結果からは、「子どもの話や参観、お便り等から、学校の取り組みや子どもの様子が伝わっていますか」の質問に親は「よくできている・できている」合わせて１００％だったのに比べ、「お家の人に学校であったことを話していますか」の質問に児童は１４％が「あまりできていない・できていない」と答えている。児童の学習について、親の意識を高める必要性を感じる。

２　研究主題　　**学力向上につながる評価の工夫**

３　主題設定の理由

５年前に教育特例校として英語科の導入が始まった。４技能の体験的な学びを充実させることで児童のコミュニケーション能力の素地の育みに迫ることができたが、４領域のうち、「読む」と「話す」の違いの捉え方に曖昧な部分が残り、評価においても見取り方がはっきりしない。今年度の研究では評価について考えていきたい。全学年の系統性を縦軸にし、あゆみの項目を踏まえた４領域と、小学校英語科教育で重要である「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「異文化に対する関心・理解」を横軸にして各学年で年間を見通した評価を作成したい。また、各時間での具体の評価規準を考え統一したものにしていきたい。子どもたちに、もっと深く考えさせ、自分の意見を持たせ、他との交流の中で再び考えさせる。教師は児童に思考力・判断力・表現力をつけさせるための方法について研究し、評価項目（ねらい）と照らし合わせながら実践し、評価による検証をしていく必要がある。その力をつけさせるための方法として「発問の工夫」を取り上げていく。児童一人ひとりに思考力・判断力・表現力についてのめあてを持たせ、授業の中で自己評価させていく。家庭では子どもの学習について関心を増してもらうこと、また読書や社会の出来事などについて親子の会話を増やしてもらうことが必要である。そのために評価（具体的には生活・学習チェック表の形式）によって意識付けを図っていく。

これら、教師・家庭・児童の三者がそれぞれ評価を活用していくことで、学力向上

を目指していきたい。

4　研究の具体的内容と方法

内容　〇英語科において、重点化・系統化された年間評価計画を作成していく。

〇学力向上のための取り組みを考え、実践していく。

方法

〈　授業研究　〉

・「英語科部会」「学力向上部会」の２ブロックで、研究を進めていく。

・指導主事を招聘して各ブロック１回ずつの研究授業を実施する。

〈　全体研究　〉　・「発問の工夫」についての学習会を持つ。

〈　児童の英語科実態調査　〉　・年間で１回（後半）に実施する。

5　年間校内研修計画　小野　真理子

月	日	曜	回	主　な　内　容	会の持ち方
4	9	水	第１回	研究の方向性について	全体
	16	水	第２回	校内研究の全体計画について	全体
	30	水	第３回	全体計画／部会ごとの研究の方向性について	全体・部会
5	14	水	第４回	部会研究	部会
	28	水	第５回	部会研究	部会
6	11	水	第６回	学習会（山梨大学　岩永先生）	全体
	25	水	第７回	授業案検討	全体
7	9	水	第８回	研究授業（英語科部会）	全体
8	6	水	第９回	学習会（雨宮先生）	全体
9	3	水	第 10 回	部会研究	部会
10	8	水	第 11 回	部会研究	部会
	15	水	第 12 回	部会研究	部会
	22	水	第 13 回	部会研究	部会
	29	水	第 14 回	授業案検討	全体
11	5	水	第 15 回	研究授業（学力向上部会）	全体
	19	水	第 16 回	部会研究	部会
12	3	水	第 17 回	部会研究（まとめ）	部会
	10	水	第 18 回	紀要について	全体
1	28	水	第 19 回	実態調査（英語）結果について	全体
2	6	金	第 20 回	研究の成果と課題について	全体
	27	金	第 21 回	来年度の研究の方向性	全体
3	4	水	第 22 回	研究紀要作成	全体